

## 本居大平の決断

— 『三大考弁』の成立をめぐる(上) —

中村 一基

(二〇〇〇年八月二日受理)

### 一 はじめに

本居派の躰きの石は、『古事記傳』に服部中庸の「三大考」が付録とされた事である。宣長の古事記傳は、歌文の営みと違つて、門人との共有された場を有しながら成立していった注釈ではなかつた。彼が『古事記傳』によって何を問題とせざるを得なかつたか、を真に理解していた門人が、どの程度いたらうか。宣長は『古事記傳』を書くことで考えつづけていた。そこには、戸惑いと決断をそのまま見せている場面もある。宣長は、その事を『古事記傳』を書くことでしか見せていない。『古事記傳』の世界に、宣長の注釈現場に足を踏み込む事ができた門人は数少ない。『古事記傳』に服部中庸の「三大考」が付録とされた事は、その数少ない門人の一人として服部中庸が認められたという事である。でも、その事が門人の中で周知の事実ではなかつた事が、宣長が「三大考をよみてしりへにしるせる」(跋文)で、

はとり中つねが此あめつちよみのかむかへはも、さとり深く物よくかむかふなる西の国々の人どももいにしへよりいまだ

えかむかへ出さりし事をし、めづらかにも考へ出たるかも、くすしくも考出たるかも、かくてこそ高天原も夜之食国もいふかきくまなくはあからひぬれ、これによりてもいにしへのつたへごとは、いよゝますくゝたふとかりけり、すめら御国のゆゑよしは、いよゝますくゝたふとかりけり、

と、「天ハ即日ナリ、其中ナル国ヲ、高天原ト云、」(三大考)。「泉ハ即チ月ナリ、其中ナル国ヲ、夜之食国ト云、」(同)という中庸の「高天原」・「夜之食国」説を宣長が画期的なものとして絶賛した事に、不可解な印象を受けたのである。中庸は言う。「いさゝか己が思ひよれることどもも有りけるを、大人に申し試みければ、あしくもあらぬさまに、許諾し給へるまゝに」(三大考自序)と。即ち、三大考の成立に宣長が深く関わっていた事を、中庸は述べているのだ。そして、この中庸の発言が偽りではなかつた事は、すでに明らかになっている。大平と「三大考」との関わりは、寛政九年、大平四十二歳の時、「三大考」を『古事記傳』巻十七に付載して出版することに対しての横井千秋(尾張名兒屋藩士。天明五年鈴屋入門)の反対に関わる事で始まる。寛政九年八月八日

付植松有信（尾張名児屋藩浪子。板木師。寛政元年鈴屋入門）宛  
大平書簡（名古屋市史資料「名家書簡集」）に、次のような内容が  
記されている。

一、三大考之事、記伝第三帙之内へ加へ可申事ニ御座候処、  
右田守公思召之義御座候由ニ而、第三帙目世上へ本出候事、  
殊之外延引ニ相成候段、尤真実公ニも御心配被成候よし、御  
尤千万奉存候。今度師家へ御伺之御紙面も拝見仕候。即右之  
訳先生被仰候ハ田守主存寄右三代（マ、）考帙中へ加之義、  
不被好段、不及是非候間、帙外ニて別ニ袋へ入世上へ弘可申  
事、可然と被仰候。右袋表書之雛形下書先生より被遣候間、  
御受取可被成候。此形御見合、御拵可然候。尤本ノ寸法、仕  
立とも記伝と同様たるべく候。

田守とは、横井千秋の通称である。要約すれば、次のような事  
態が伺える。千秋が「三大考」を『古事記傳』巻十七に付載して  
出版することを反対しているので、『古事記傳』第三帙の出版が遅  
れていて、その事を同門の鈴木真実（尾張名児屋藩士。寛政元年  
鈴屋入門）も心配していることが、有信から報せられ、その対処  
を大平に相談してきたことがわかる。右相談を裏付けるように、  
同年七月八日付有信宛宣長書簡において、

一、古事記傳三帙メ、先五拾部御摺被成候由、右ハ千秋主よ  
り、可被差越候へ共、暫間も御座可有哉ニ付、先御内はニ而  
一部御越し被下、致落手、致一見候処、宜出来、扱々大慶不  
少候。先以神代ノ分相揃、別而大悦仕候。千秋主よりハ、い  
まだ参不申候。

と、三帙目を一部、宣長が有信から入手している事が述べられ  
ている。両書簡から、わかる事は、「三大考」の付載されていない  
『古事記傳』第三帙の板本が刷り上がっている事態である。なお、  
『三大考』板本も刷り上がっていた事が、宣長の『借書簿』の寛政  
九年の条に「（六月）廿九日／＼、三大考板本 服部義内」によっ  
て知られる。服部義内とは、中庸のことである。即ち、別刷の形  
で宣長のもとに送られてきたのである。さて、相談を受けた大平  
が、宣長のもとで見たのは、千秋の宣長宛の「御伺之御紙面」で  
あった。その内容は、「三大考」を付載する事の疑義であったと、  
文面から推測される。大平書簡によれば、宣長は千秋の意図と有  
信の困惑を配慮して、「帙外ニて別ニ袋へ入世上へ弘可申事」を認  
めた。ただ、その体裁については古事記傳と同じにする事を指示  
したのである。その結果、どうなったか。即ち、売本はどのよう  
な体裁になったか、ということである。どのような経緯かは不明  
だが、宣長の意向が千秋にも通じたのか、寛政九年九月十九日付  
中庸宛宣長書簡では、『古事記傳』第三帙の板本を一部進上する事  
を述べた後で、次のように記している。

尤先頃掛御目申候三大考共、御留置可被成候、三大考も弥第  
三帙メへ一所ニ相加へ、板（行）売弘メ申候積ニ相成申候由  
申越候而、別而致大慶候、

そして、その言葉を裏付けるように、寛政九年十一月某日付小  
篠敏宛宣長書簡には、

一、古事記傳第三帙目【三大考相添】板本出来致候ニ付、早  
速周防様へもさし上げ申候、直ニ江戸へ遣し申候

とある。大平は仲介者として、「三大考」付載しての出版に宣長が積極的な態度を示したことを実感したはずである。しかし、千秋が疑義を呈した真意については理解していない。いや、宣長が判断した以上、大平に判断の必要はありえない。宣長の没するまで、宣長が「三大考」付載の真意を、大平は考える必要が無かったのである。そして、大平が宣長の後継者であることを問われる事件が「三大考」をめぐるものになろうとは想像もしていなかったであろう。

## 二 大平の困惑—三大考を付載した事をめぐって—

大平の身边で三大考に対する動きが顕在化してくるのは、宣長没後である。三大考に関する諸説が、大平のもとに集まってきた。それは、当然の流れでもあった。そして、その諸説を皆が知りたがったのも事実である。享和元年（一八〇一）には中庸の「三大考追考」が形を整え、大平に送られた事が、信友の「三大考出来候よし、先頃並木方へ仰こされ候、（略）いまた上木なく候はばなにとぞ早々御許借奉希候。」に対して大平の「清書出来候はは早々写させて見せ奉るへし。」（『友問平答』享和三年成）によって判明する。同一年七月に、外宮権禰宜度会正淳（橋村正兌）によって書かれた「三大考説弁」<sup>6</sup>が、早々に大平に送られ、これも又、早々に江戸鈴門に知らされていた事が、和泉真国の「御国山田の橋村弾正と申す若人、三大考の斥非を書き候て君まで送り候よし、志の程さてさて驚入候。何卒御書きうつし被下候奉願候。三大考にはおのれも少々愚論御座候。跡より可申上候。」（享和三年）三月七日付大平宛和泉和磨書簡<sup>7</sup>によって明らかである。三大考への宣長の支持は、三大考を『古事記傳』第三帙目に付載しただけでなく、「三大考をよみてしりへにせる」という宣長の

跋文にも明らかであった。その跋文において、

はとり中つねが此あめつちよみのかむかへはも、さとり深く物よくかむかふなる西の国々の人どももいにしへよりいまだえかむかへ出さりし事をし、めづらかにも考へ出たるかも、くすしくも考出たるかも、かくてこそ高天原も夜之食国もいふかしくまなくはあからひぬれ、これによりてもいにしへのつたへごとは、いよゝますゝたふとかりけり、すめら御国のゆゑよしは、いよゝますゝたふとかりけり、

と、宣長は中庸の「天ハ即日ナリ、其中ナル国ヲ、高天原ト云、」（三大考）、「泉ハ即チ月ナリ、其中ナル国ヲ、夜之食国ト云、」（同）という「高天原」・「夜之食国」説を絶賛したのである。大平はこれほど明確な宣長の支持を前に、鈴屋門内部からの疑問・批判に対して、どのように答えることができるのか。つねづね、「豫美と申すは、地下の根底に在りて、根国底国とも申して、甚ダきたなく悪き国にて、死せる人の罷往ところなり」（『玉くしげ』別巻）と聞かされていた大平に、その黄泉がなせ月なのかという理解は可能ではなかった。さらに、大平は、宣長の死の自覚を理解しえなかった。寛政十二年七月、宣長は春庭、春村宛に『遺言書』を認めた。そして、九月十七日、山室山妙楽寺を訪れ、自らの墓所を定めた。宣長から墓所を定めるための同道を求められたのに対して、大平は「さて私申候ハ、うつそみ之世之人無き跡の事思ひ斗申置候ハさかしら事にて古意に背き可申哉なと答へ居申候。」（『本居大人死去前後日記』）と不本意な態度を見せていた。しかし、宣長の死によって、後継者大平は否応無く『古事記傳』と三大考との整合性に関する疑問に答える立場に立たざるを得なくなった。その事は、宣長の魂の行方という門人にとっては最も重

要な疑問に答えることでもあった。宣長没後、最も早い時期の大平のこの問題に関する考えを知る最も貴重な資料は『藤垣内問答録』（享和三年正月伴信友問、同年五月大平答。）と、「友問平答」（信友再問、同年九月十六日・廿一日記。）であろう。信友は、宣長没後の門人として認められ、また、享和三年十月、大平に入門した。信友の、『古事記傳』と三大考との間に相違がある場合は、宣長は三大考の方を是と考えたのか、という至極当然の疑問に対して、大平は「三大考を是ともさだめがたし、此外すべて二説ある事は、いづれもさだめがたければなり、されど見る人の心ごろに定むべし。」（『藤垣内問答録』）と答えた。ここでは、三大考を載せたのは、宣長も「天地泉」の生成に関しては、明確な考えを持ちえなかったというのが、大平の理解として信友に答えられている。この答えは、明らかに宣長の三大考跋文を無視した答えである。信友は、その事には触れず、自分の納得する方の説に従えばよいという考えを受けて、『古事記傳』の疑問は三大考によって晴れるので、自分は三大考を定論としたいが、と再度打診してきた。大平は、それに対して次のように答えている。

○御説の如く師も三大考の説をうべなひおかれたるは、天地泉の事はまづ三大考の説の如く心得おくべき也。○大平つねに神代の講尺するに三大考の説によらされは天地泉の事はいかにともたしかなる當り所なくてさとしかたければ、いつも三大考の説によりて口説し侍る也、されと三大考ハ人智のさかしらもて神代の伝へを考へはかりたる事なれば、同じくは三大考をはなれてたに神代の文面のままにて心得たき物也、猶々考ふべき事也。（『友問平答』）

この曖昧な答えに、大平の困惑がありありと伺える。宣長の後

継者であるがゆえの苦渋と言つてよい。三大考の説を、宣長が肯定した事を、大平も否定できない。大平自身も三大考の説を利用しながらも、三大考の説が「人智のさかしらもて神代の伝へを考へはかりたる」説だとして（漢心）批判の踏襲、「神代の文面のまま」の理解を対置しながら、自らの結論は語り得なかつたのである。

### 三 大平の決断

大平が始めて三大考に対して、自己の説を開陳したのが『カリニツクリマケタルカタ』（文化八年「二八一」成）においてであり、また『三大考弁』（同年十一月成）であった。その奥書に、大平は『三大考弁』執筆の動機を次のように記した。

此大平力説ハコノ頃神代ノコトヲ人ニ説キカストテ三大考ヲ委ク見テ疑カハシク思ヒテ古事記ヲモ日本紀ヲモヨク考タルヨリカノ僻コトヲ僻事ト見出テハシハラクモ黙アルコトヲエステカクアケツラフニナムアル

この奥書と「大平つねに神代の講尺するに三大考の説によらされは天地泉の事はいかにともたしかなる當り所なくてさとしかたければ、いつも三大考の説によりて口説し侍る也」（『友問平答』）とを比較すれば、八年の歳月「48歳〜56歳」、彼は彼なりに三大考と対峙して来たことが浮かび上がつてこよう。大平は宣長の惑いを自己の惑いとする事で抱え込んできたジレンマを、『カリニツクリマケタルカタ』『三大考弁』で断つことを決意したのである。その決意を促したのが、度会正淳の著した『三大考説弁』（享和二年「一八〇二」七月成）や、鈴門古参の鈴木木朗の三大考説であっ

たことは、『三大考弁』に三大考に関する書として「尾張殿人鈴木常助朗ノ三大考ノ説」「山田入度会正淳神主三大考説辨」の二説を上げてゐることから明らかである。〔前者は『三大考弁』付録「三大考書人」として、後者は『三大考弁』中に五項目取上げられてゐる。〕また、大平の説を補う形で、須賀直入の『三大考弁』補説が書かれてゐる。その補説が書かれた動機として、直入が「三大考の誤説の弁へは藤垣内翁の論にていといと明なれば今さらに言へきことあらざれども、なほ惑へる人ありて、とにかく云ひあらそひ問からに直入それに答たることども一つ二つ」と記してゐる。ように、文化八年当時、三大考論議が大平の周辺で起つてゐて、その論議は大平の『三大考弁』によつても収束する気配を見せてゐない。言わば、そのような論議の趨勢に押されて、大平が本居派の総帥として、自らの考えを明確にせざる得なかつたと考えた方が妥当であろう。その事は、『三大考説弁』に対して「其書の内には取かたき説とも多かりしかば、久しく打置てとり出されつるを、今此論文を書たるに依て、又取出て見るに」(『三大考弁』)と述べてゐる事からも推測される。その意味で、大平の「三大考論、御ついでニ、安田伝大夫へも御見せ可被下候。尤、橋村氏、益谷大学主などへも、見せ申度候事。」(十月廿七日付足代弘訓宛大平書簡<sup>⑧</sup>)という書簡が注目される。この書簡の年次については、築瀬一雄氏は『本居大平書翰集(二)』解説で文化六年とされ、「三大考論」を『三大考弁』の草稿と推測されている。益谷大学、安田伝大夫は宣長の門人であり、橋村氏は橋村正兌、『三大考説弁』の著者度会正淳の事であり、大平に文化三年入門してゐる。そして、書簡の相手である足代弘訓も外宮の神主であるが、文化二年に大平に入門してゐる。この大平の希望通りだとすれば、『三大考弁』は草稿段階から、外宮の宣長・大平門人へと回覧された経緯が推測される。

#### 四 鈴木朗「三大考書人」と「三大考鈴木朗説」

『三大考弁』執筆のおり、大平が参照した三大考論は「尾張殿人鈴木常助朗ノ三大考ノ説」「山田入度会正淳神主三大考説辨」(『三大考弁』)である。「三大考説辨」が享和二年に書かれた事は「享和二年ノ頃」(同弁)と明確に記されているのに、「鈴木常助朗ノ三大考ノ説」については、「既(はや)ク」(同弁)とのみ記されているだけである。その説は「オクニ全文ヲツラヌヘシ」(同弁)とあり、そして、掲載されたのが「三大考書人」であつた。末尾に「右ハ尾張人鈴木常介朗ノ三大考ノ頭ニ書加タル辨也」とある。では、大平に鈴木朗の三大考の説として、渡されてゐたのは、この書人だけだったのか。現在、東大本居文庫に「三大考鈴木朗説ノ同 度会正淳説辨」と表紙に書かれた資料が所蔵されてゐる。この資料に関しては、尾崎知光氏に「三大考鈴木朗説」について(『文莫』三号)という御論文があり、そこに「三大考鈴木朗説」が全文復刻されている。そこには、「十一月十六日之御書当月八日夜植松にて落手仕候」に始まる鈴木朗の大平への「十二月十日」付の書簡が貼付されている。この年次については、尾崎氏は、同書簡に『音声考』『希雅』が板刻にかかつてゐて、大平に序文を求めている点、又『音声考』板本に付された大平の序文(『雅言音声考序』)の日付が文化十三年九月十五日である事から、前年の文化十二年のものであると推測されていて、筆者もその事については同意見である。両者の三大考をめぐるやりとりの重要な部分と思われるのは、

三大考御説御示シ被下拜見仕候愚案一条相認呈上仕候且又先年相認候愚説も御写し被下久振にて一覽仕候所兎角愚意ハ右

之通ニ御坐候間少々加筆仕り候て奉返上候猶又文言並認方不  
考合之所可然御直し被下候上御一所ニ御伝へ可被下奉願候  
(尾崎氏翻字)

である。文化十二年の末に、「三大考弁」(文化八年成)が送ら  
れてきている。それも、かつて大平のもとに送った「三大考ヲヨ  
ミテイヘル事」(「三大考鈴木朗説」)の写しに大平が加筆したもの  
と一所である。同書簡によれば、鈴木朗は三大考に対する考え  
は基本的に変わりがないとして、それに少々加筆した上で、大平  
に返送したという。なお、尾崎氏は「愚案一条」を、「三大考鈴木  
朗説」に合綴されていた「三大考説弁」に対するものと考えてお  
られるが、これは、書簡の文脈からだけでなく、「愚案一条」の  
「日即天也高天原ト云ハ・三大考論弁」という記述に相当する  
部分が「三大考論弁」の、

三大考ニ日即天也高天原ト云ハアノ日ゾト謂ル説実ニ適当レ  
ル考ヘ也。日ハ日ノ神ノ知食國ナルコト月ハ月読命ノ知食國  
ナルコト諾ヒ信ベキ説ナリケリ。

に相当する事からも、「大平カ論弁」(「三大考ヲヨミテイヘル  
事」)に末尾に記された鈴木朗宛大平書簡(、即ち「三大考弁」)をさ  
すと考えられる。「三大考弁」の中で「三大考」を肯定している唯  
一の部分に、鈴木朗は「此事古書ニ明文ナシ然ルヲサダカニカク  
サダメタルハサカシラノ推アテ也」と疑問を呈したのである。こ  
の疑問は植松茂岳の「天説弁」へと連なるのだが、ここでは、「三  
大考ヲヨミテイヘル事」の問題にこだわる。この末尾に記された  
大平の鈴木朗宛書簡(文化十二年十一月十六日付)は、その意味  
で興味深いので、全文を次に載せる。

コレハ先年書テ見セ玉ヘル□本書ハ三大考作者中庸ヘワタシ  
オキタレハ今又ソノ本書ヲシハラクカリテ写シタル也本書ハ  
又中庸ヘワタシオケリソハ中庸モ追考書テ後ニ再論ニモカ、  
ルコ、ロアルヨシ也

コノ文コノマ、大平カ論弁ノオクニ記スコ、ロナレドモ又今  
一度カヘリ見玉ヒテ書改メ玉フ事モアランカト思ヘハコノヨ  
シトヒタツ子侍ル也 大平ノ鈴木常介様

問題なのは、やはり「先年書テ見セ玉ヘル」(「先年相認候愚  
説」)とある「先年」とは、いつ頃なのかという事である。尾崎氏  
は、鈴木朗が論争に加わり、本書を成立させたのを『靈能眞柱』  
が刊行された「文化十年以後で、文化十二年より前の年であるか  
ら、文化十、十一年の間であったとみななければならない。」(『文  
莫』三号、九四頁)としている。でも、この説はいささか納得し  
がたい。なぜなら、「三大考弁」の中で鈴木朗説(「三大考書入」)  
を紹介している大平が、鈴木朗からの三大考説を中庸に渡すのは  
良いとしても、その内容を検討することなくすぐに渡して、文化  
十二年になって中庸から借り出して写し検討を加えたことの不自  
然さが目立つのである。それに、この書簡の中の「コノ文コノ  
マ、大平カ論弁ノオクニ記スコ、ロナレドモ」という一節と、「三  
大考弁」においての「尾張殿人鈴木常助朗ノ三大考ノ説」を「大  
意ヲノミ云テネモコロニアケツラヘルサマナラスサレト三大考ヲ  
早く□アケツラヘル説ナレハオクニ全文ヲツラヌヘシ」として  
「三大考書入」が載せられている事との関わりである。これらの流  
れに整合性を考えるならば、文化八年当時、大平の手元には「大  
意ヲノミ云テネモコロニアケツラヘルサマ」ではない「三大考書  
入」があった。それは、「三大考ヲ早く□アケツラヘル説」という  
事で画期的であったが、大平としては満足のいくものではなかつ

た。ところが、その後、鈴木朗から纏まった形での「三大考ヲヨミテイヘル事」が送られてきた。大平としては、それを「三大考書人」と差し替えて、「三大考弁」の末尾に掲載したいという意向をもった、というのがその経緯と考えられる。

##### 五 「五行餘ノ僻事」

文化八年(一八一)、大平は『カリニツクリマケタルカタ』(本居文庫蔵)において、三大考の天地泉の図に対抗して自らの天地泉の図を描いた。そこで、彼は「月則泉説」を否定、「泉地中説」を主張した。その主張は、三大考が「月則泉説」・「月夜見命須佐之男命同神説」の根拠と仰いだ『古事記傳』九卷神代七卷細注の

もと月夜見ノ命と須佐之男ノ命とは、一ツ神かと思はるゝこと多し、まづ月夜見の夜見は黄泉にて、須佐之男ノ命の就帰たまへる国ノ名なり、根ノ国は即チ黄泉のことなる由は、既に上に云るが如し、晝夜を以テ云へば、晝は此ノ世、夜は黄泉なれば、夜ノ食国も由あり、又此記に、須佐之男ノ命に、海原を治せと事依したまへると、書紀一書に、月夜見ノ命に、蒼海原潮之八百重を治せとあるとを、思ひ合すべし、又この須佐之男ノ命の、大宜都比賣ノ神を殺し給へるを、書紀には月夜見ノ命として、天照大神怒甚之、曰汝是悪神、不須相見、乃一日一夜隔離而住とあるも、須佐之男ノ命めきて聞ゆるをや、

を、『古事記傳』「六万行ノ内ノ五行餘ノ僻事」(『カリニツクリマケタルカタ』)として否定することに始まった。細注の末尾に、

然れども諸の古書に、此レを一ツ神としたる伝へはなくして、みな別神としたるは、全一ツ神の如くにして、なほ別神に坐ス、深き所以あることなるべし、今たやすく云べきにあらず、

と、宣長が「月夜見命須佐之男命同神説」の断定を控えているのを承知の上である。

##### 六 「月夜見命須佐之男命同神説」批判

大平は天地泉六図を描き、その四図において「地ノ根底」を地中に描き、「コノ内ニヨミノ国アル也」と書き入れた(『カリニツクリマケタルカタ』)。則ち、「泉地中説」の主張である。なぜ、大平はそれほど「泉地中説」にこだわったのか。それは、記・紀の忠実な理解の上に立った『古事記傳』九卷神代七卷細注の否定が、「泉地中説」の成立を可能にする事を証明したかったのではないか。それは、あたかも三大考が『古事記傳』の発展という形に對峙するものとして。大平は「泉ノ月説」の成立根拠を「月夜見命須佐之男命同神説」と「月夜見の夜見は黄泉にて」(『古事記傳』九卷神代七卷細注)という「夜見ニ黄泉同一説」にあると判断した。彼がそれらを「強説」「僻説」(『三大考弁』)とする根拠は、記・紀の(1)アハキ原でのミソギにおける三神誕生(2)三神の分割統治(3)スサノヲの神逐(4)ツキヨミが海原と夜之食国とを統治、といった文脈においてである。則ち、大平は右のような文脈をたどりながら、アマテラス・ツクヨミ・スサノヲ三神は元来、「天下の主」たる存在としてイザナギによって考えられた。アマテラスは高天原、ツクヨミは夜之食国、スサノヲは海原という分割がされた。ところが、スサノヲが「妣国根之堅洲国」に行くことを願っ

て追放される。その結果、海原をもツクヨミが統治するようになる。大平は〔月夜見命須佐之男命同神説〕に對して、

此海原のことは月読命に夜食国と海原とを兼て任し玉へるなるべし、かの二神を一神なるべしと思ひ誤れるは此文に由れることなれども、そも一日一夜を隔つなど有ることは、月読命のみに係れることなれば、須佐之男命にはいさゝかもまぎらはしきことあらじをや。

〔注〕「一日一夜を隔つ」はアマテラスがツクヨミに對しての怒りの言葉。】

と、その紛れる必然性の無さを指摘する。そして、大平はこの〔月夜見命須佐之男命異神説〕を補強するものとして、門人（文化三年入門）度会正淳の著した『三大考説弁』（享和二年七月成）の中の「よくあげつらひたる説」（『三大考弁』）を取り入れた。その説とは二神の紛れる伝があるといつてそれを一神とするならば「出雲国と紀伊国は神代に似たる事のあれば一国とせむか」という類似性に基づく紛れ批判であり、もし一神とするならば「伊邪那岐命の櫛原御瀬の御時御鼻を洗ひ給ひし重き神事はいたづらごとなるをや」という三貴子誕生の神事の重さの自覚である。また、紀に一書として挙げられた中には日月の神のみの成り立ちについての伝は一切見えないという説が、正淳の〔月夜見命須佐之男命異神説〕の根拠であった。

### 七 〔夜見〓黄泉同一説〕批判

大平が〔泉〓月説〕の根拠として批判すべき説に〔夜見〓黄泉同一説〕があった。三大考弁において、彼はその批判を行っている

ない。その代わりに、門人須賀直入が大平の代わりに「ナホ惑へル人」の問いに答えたもの（文化八年十一月七日）を付録として載せ、その中で〔夜見〓黄泉同一説〕は次のように否定された。

月ヨミノ尊ノ御名ヲタゞヨミノミコトト申セルコトモナク、又ヨミノ国ヲツクヨミノ国ト云ルコトモナシ、又コノ神ノ御名ハツクヨミト申スニテミテフ心ハ古事記傳ノ六（七十六丁）ニ御名ノ義師説ニ綿津見山津見などの如く美〔ミ〕ハ持〔モチ〕にて月夜持〔ツクヨモチ〕の意なりとあり、夜之食国を所知看す大御神に坐せは然も有りぬべしトアリ、国ノ名ハヨミト云ニテモトヨリ唱コトナリ、ヨミト云コトハ岡部翁ノ祝詞考（鎮火祭ノ條）ニ與美（ヨミ）ハ暗（ヤミ）也トアリ、古事記傳ノ六（三三丁）ニ黄泉国云々下文に燭一火とあれば暗處と見えトアリサモアルベシ、又ヨミノ国ノ地下ニアルコトハ古事記傳六（三三四丁）ニアリ、又藤垣内翁ノ考モアルナリ、

我々は右の答えから、直入が『古事記傳』六に基づいて〔夜見〓黄泉同一説〕を否定したという印象を受ける。しかし、『古事記傳』六に当たってみれば、意図的に〔夜見〓黄泉同一説〕の可能性を匂わしていく文脈を無視していることに気付く。それは、

名ノ義は、口決に夜見土とある、土ノ字は非なれど、夜見はさも有りぬべし、下文に燭一火とあれば暗處と見え、又夜之食国を知看月読命の、読てふ御名も通ひて聞ゆればなり（『古事記傳』六 三三丁）

といった部分である。右の文脈では「暗處」は夜の暗さを指示



し、地中のイメージではない。其故に、夜之食国と自然に結びつき、夜之食国を統治する月読命の詠に夜見が正に読み込まれている、と連想されている。その事は、『古事記傳』六(七十六丁)の引用本文の後に「又黄泉と云名も相通ひて聞ゆ」と再度確認されている、問題の『古事記傳』九卷神代七卷細注の「もと月夜見ノ命と須佐之男ノ命とは、一ツ神かと思はるゝこと多し、まづ月夜見の夜見は黄泉にて、須佐之男ノ命の就帰たまへる国ノ名なり」と(月夜見命須佐之男命同神説)の根拠ともなっていくのである。直入は敢えてそれらを無視した。それは、細注を「五行餘ノ僻事」とした大平に做ったからである。

〔夜見||黄泉同一説〕批判が成立したとして、それでは〔黄泉地中説〕が成立するのか。直入は「ヨミノ国ノ地下ニアルコトハ古事記傳六(三丁四丁)ニアリ、又藤垣内翁ノ考モアルナリ」と答えているが、大平は『カリニツクリマケタルカタ』において〔黄泉地中説〕を图示したが、特にその理由については述べていない。となれば、その根拠は、やはり『古事記傳』に求めざるをえない。

## 注

- (1) 西川順士「三大考を中心とする宇宙観の問題」神宮皇学館編『肇国文化論文集』昭和十六年。小澤正夫「三大考をめぐる論争」『國語と國文學』第二十卷第五号、昭和十八。西川順士「三大考の成立について」『皇学館大学紀要』十輯。
- (2) 植松茂『植松有信』愛知県郷土資料刊行会、昭和五四年、二〇七頁。
- (3) 『本居宣長全集』第二十卷(筑摩書房、昭和五十年)。
- (4) 本居文庫蔵。
- (5) 大平門人〔文化三年入門〕、春庭門人〔文化七年入門〕。

- (6) 「享和二年七月 度会正淳ノ右、答中村氏之問規三大考」『三大考説弁ノ橋村正兌初考』識語。本居文庫蔵。
- (7) 佐々木信綱『増訂賀茂真淵と本居宣長』(湯川弘文社、昭和十年)所載。
- (8) 笹月清美『本居宣長の研究』(岩波書店、昭和十九年)。
- (9) 『増補本居宣長全集 本居大平全集』。
- (10) 本居文庫蔵。
- (11) 『藤垣内門人姓名録』本居文庫蔵。
- (12) 本居文庫蔵。
- (13) 本居文庫蔵。
- (14) 「文化八年十一月七日 須賀直入」(奥書)。
- (15) 『本居大平書翰集(二)』。

\* 岩手大学教育学部